

満洲依伯村覚之書

第十次依伯村開拓団小史

会員 矢野 徳 弥

入植 第五年度

昭和二十年二月十一日、依伯村開拓団は第五回の入植記念日を迎え、いよいよ最後の建設の年に入つた。

暮れ以来の、無事の生活が、なおしばらく長く続くかに見えだが、三月後半に過ぎて、最後の壮丁十一名が団を離れると、さすがに戦争の暗い影を感せずにはいらぬ事があった。

四月に入り、本年度の本隊が入団したが、その数は僅か七名にとどまり、厳しい戦局を反映して其の後、新たに入団者はなく、結局依伯村は百五十二戸を以て、その建設を終る事になった。

一方、隊員送別の是非が中央で論議されていた報、開拓団場では、最終的に農商省の方針に従い、計画百十名の村に、二十名の隊員が派遣されてきた。

やがて満洲全土が春耕の季節を迎え、依伯村の地も、田舎の作付けが始まったが、前年入植した大量の農家が、自己経営に移行したこともあり、その意気は大いに上った。しかし、作業に入ると間もなく二十三号といふ急死者が出て、意外な年間取りを見せた。

沖繩戦が終息に近づく頃から、本土へ大陸間の往來は非常に困難となり、農場隊員の長期駐留が決められたが、この措置をめぐって自報者が出るなど、隊員に与えた動搖は大きかった。

五月に続き、六月にも三十名近い団員が召集され、農作業の困難は一層増大したが、団境の情勢が緊迫した七月下旬から、関東軍の根こそぎ動員が始まり、団から成人男子の殆んどが姿を消し、その治安さえ心配される状況になった。

八月九日、ソ連軍は一斉に団境を越え、怒涛の如く満洲国内に侵入した。このため団境前線近くに入植させられていた開拓団は、立ち所は潰滅し、開拓民に大きな犠牲者を出した。ところが、幸いにも依伯を含め四平省下の開拓団は、敵の侵攻経路から外れ、この難を逃れることができた。

そして、八月十五日の終戦を、意外と静かな形で迎えたのである。

一 嵐の前

依伯村開拓団の先遣隊が、この地に始めて足を入れたのは、昭和十六年（昭和七年）二月十一日、紀元節の佳き日であった。それから五年、幾多の困難を克服して依伯村の建設は着実に進められ、いよいよ第一期計画（街心の村制移行まで）終了の年を迎えた。

ところが、依伯村開拓団入植の年で始まった太平洋戦争は、緒戦の戦果は最後の勝利と夢見られた末の間、一年半も経たぬ程に敵の反攻に出逢い、一々人数減勢に転じた後は、止めどもなく後退を続けるばかりで、ついには日本本土防衛の要である内南洋に敵手に帰し、開戦五年にして、早くも戦争は最後の段階に近づいていた。なんと

う皮肉であつたらう。

二月に入つてルソン島のマニラも陥落し、比島戦域に於ける日本軍の抵抗も終りに近づいていた。敵は也がて本上の一却である沖籠に侵攻する勢いである。しかし、満州の奥深く入つた開拓地では、戦争はなお遠い存在と感ぜられ、人々は近づいた春耕の忙しい労働に備へ、少時の休息を楽しんでいた。也がて自分達の運命と大きく狂ふ寸重大を決定しソ連の対日参戦に於、黒海に面した小さな町ヤルツで、この時期行なわれていようとは、夢にも知らなかつたのである。

入植記念日の二月十一日の朝、団員達は、早くから国民学校東庭の佐伯神社に参拝し、祖国の無事を祈るとともに、佐伯村建設の完遂を誓ひ、そのあと団主催の記念式に出席した。式は近く入隊する青年達の壮行会を兼ねていた。

会場には四年間の成果を誇るかの如く、自前の隊も幾かの料理が山と盛られ、本部で始めて醸造された上等の白酒が帝座配られて、決戦体制下、他では見られぬ盛宴が開かれたのである。そして、この日を限りとして、無事を祭しんだ冬籠りの生活は別れを告げた。

三月に入ると、残されていた壯丁（昭和十九年検査）十一名が次々と団を去つた。人々は、さすがに戦争の暗い影が、身辺に迫つたことを感じないはいられなかつた。一か月にわたり死闘をつづけていた硫黄島で、二万三千の日本軍が潰滅したのも、この時期である。

とこのころで、三月に団を解散した壯丁達も多くは、興安北省海拉尔方面の部隊に入隊させられたが、そこで彼等を待つていたものは何であつたか。それは永年にわたる集積された武器・弾薬、その他の戦軍資材を、既設の陣地から撤収して、本土防衛のため南九州方面に転送する

作業であつた。

二 本隊最後の入植

(本隊の入団)

アメリカ軍が沖籠に上陸したと伝えられるその翌日、二十年度の本隊が多量の家族を連れて入団した。出身地の内訳は西尾村四名、中野村二名、その他一名で、いずれも香江川沿いの入植地である。戦争の前途が予断を許さぬこの時期、家族共々故郷を捨て満州移住の決意をさせ、天背後には、瞬時にして家屋・田畑を奪い去つた。二年前の大水害（昭和十八年十月の大水害）が、大きく影を落とっていたことを否定できない。

一行が家を出て団に入るまでの道程は、大変な難行であつた。この中の一人、川野武一（西尾村、八名の家族を同伴して入団）が別荘後知人に語つたところでは、

「三月二十六日、因屋を出るときから空襲警報が出ていた。列車が高城までくると、航空機が爆撃を受けて、地上してわり、鉄道も破壊され不通であつた。止むなく大勢の市民が消火や救護に走り廻っている中を、子供を背負ひ持てるだけの荷物を手押し、大分駅まで歩いた。そのあと心配された連絡船は無事であつたが、朝鮮を北上する途中がまた大変で、車中全く食物が入りてきず、九一日は絶食した。やつとこのこと夜にわたつて、離合待の間に車外で炊飯し、どうにか空腹をなぐさめることができた。

翌日の午後、列車は奉天に着いたが、出発のとき八名で出た西員の一人が、家族と共に引き返してしまつた。奉天在住の知人に出会い、戦争は間もなく負けると聞かされたらしい。」

とのことである。一行の中には、前年入植した者の家族も含まれていて、引率には特別の苦勞があつてはちがいない。

(入植の終了)

この本隊のあと、母村側から再び入植者が送られてくることとは無かつた。もはや激島がこれ許さなかつた。この結果、佐伯開拓団の入植は、最終的に百五十二戸(登録団員百五十二名)をもつて打ち切られ、爾後、この規模で建設の終了を目標することになつた。

入植直後の一時期には、準備された材料の規模から三百戸の入植が可能と判断され、「大使伯締」の建設を費見たこともあつた。その後母村側の事情が悪化して、再び当初の計画二百戸に減されたが、五年経つた今、その目標にも達せずして団の建設を終ることは、まことに残念であつた。

しかし、入植の不振は単に佐伯開拓団に限られたものでなく、第一期五年計画全般の達成率が、着落開拓団とも含めて五八・七%の一振開拓団(非常に不振)に止まつていたことと比較すると、佐伯開拓団の成績(計画対比七六%)は、それなりの評価に耐えるものであつた。本隊入植直後の在籍人員は、山産、死亡の關係を多少正確さに欠けるが、

男子 五百五十四名

女子 五百二名

合計 六百五十六名

で、同期の近隣開拓団と比べると、佐伯開拓団は規模の大きい方に属している。

一方、戦後引揚機務局に提出された八月十五日現在、昌園地域開拓団の在籍数も、次のとおりである。

佐伯開拓団(大分県)

六百五十二名

山口開拓団(山口県)

三百九十六名

最上開拓団(山形県) 二百四十名
成陵開拓団(広島県) 四百三十四名

(満洲農業移民送出計画の挫折)

昭和二十年に入り、本土決戦が不可避とされる状況下で、なお大小三十九の開拓団の送出が行われ、昌園県下にも新しく山形村(山形県)、高南郷(高知県)などの開拓団が入植した。しかし、これ等建設開拓団に入るものを念め、僅かに千五十六名が渡航したところ、ついに移民送出は中止された。海上・陸上を問わず輸送の事実上の途絶が、この決定を生んだのである。

かくて昭和七年の第一次以来、十四次におたり進められてきた日本人農業移民はここで打ち切られ、団案としてとり上げられた「満洲農業移民百万戸送出計画」は事実上挫折したのである。

昭和二十五年五月現在における、外務省調べの開拓民送出状況(養身隊を除く)は、

戸数(団員数) 五万二千四百二十八戸

人口(家族含) 二十二万二千五百五十七人

となつてはいるが、満洲拓植公社調査の数字とは、かなりの開きがある。満洲調査は終戦時の開拓民数は、家族を含め、十六万七千九十一人(前者は在籍者を示し、後者は応召者等を除いた実数)によつたものであろう。

三、最後の農場隊員

戦況の悪化から、二十年度の満洲勤労奉仕隊の派遣をめぐり、政府内部に意見の対立があり、他の道府関係はこれを中止したが、食糧確保の責任を持つ農商省だけは譲らず、配下の報国農場に既定方針どおり隊員を送ることと決めた。

これを受け大分県では、三月、四月、五月の三回にわたり、男女を合せ九十名の隊員を派遣した。これは計画に二十名不足する数字であった。

第一回は男子二十三名による先遣隊で、玖珠の農兵隊で三日間の訓練を受けた後、三月二十二日大分を出発、二十六日農場入りした。引率及農場の職務主任（副場長相当）大竹 傳であった。

第二回の本隊は、女子を主体とする四十八名で、四月中旬現地に入ったが、その日時は明らかでない。引率及農場教練指導員の田川勝美と、新しく女子の指導員となつて赴任する北 幸子（西岡東郡田添村出身、四十九才）の兩名であった。

第三回の後続隊は、男女合せて十九名で、県農政畜産課の梅原治夫が引率し、五月二十日大分を出発、二十八日農場に到着した。

この年の農場隊員の編成は、次のとおりである。

（本部は省略）

中隊長（指導員） 田川勝美、

小隊長（男子） 吉良 仁吉（南延部郡中野村）

（女子） 伊藤ミエ子（白田郡夜明村）

第一班長 中津留 藤吉（南池部郡木立村）

第二班長 工藤 末広（忠見郡日出町）

第三班長 豊田 藤木（大分県東郡東町）

第四班長 藤木 藤木（下志那山移村）

なお、隊員のうち男子は、隊長・班長を除き、殆んどが兵役年令に満たぬ十六才以下の少年で、中には国民学校高等科在学中の者も含まれるなど、選出の困難な事情を示していた。

報国農場に課された任務は、いうまでもなく食糧の増産である。これまで日本内地の食糧配給量は、米にして

一人一月二合三勺（九百グラム）を目標としてきたが、二十年になると、これを八百グラムに下げた。しかし、それでもなお二百万トンが不足し、これをどうしても満州から供給する必要があり、その責任はいきおい開拓団と報国農場に課されたのである。

大分県報国農場は、他と異なりかなり広大な面積の畑地を管理していた。しかし、これは農場専属の若手頭を通じて精算耕作に出し、隊員達はあくまで水田耕作による米穀増産に取組む方針を決めた。

ことしは、一部の水田を圃に譲つたため、新たに開田が必要であった。幸い、農場の南西側には、造成されたままの水田用地がかなりあり、面積狭小なもので、先遣隊が入るとすぐに火を入れ、水路を整備して本隊の到着を待ち、その後両者協力して九十町歩の水田を準備したのである。

四 召集令状

三月に現役の壯丁が入隊したあと、圃にははじはらく召集令状が届かなくなった。食糧確保の重要性から、一般開拓団には余程の距離が加えられていたと思われる。

端午の節句が終りしはらくすると、本部農産の梨が白い花をつけはじめ、一週間もすると満開になる。三百本

からの成木が一斉に花を開くと、桜の花も及びない美しさである。圃では毎年この梨の木の下で花見を行なう。そしてこの行事が終わると、いよいよ本格的な田植え準備に入るのである。この年の花見は五月十四日曜日に行なわれ、その翌日から水田の荒起しが始められた。通水予定は六月一日である。一年の中で一番急がしく、かつ男子の要求される季節である。

とこもが、軍はそれをどう考へたのか、それは猶予と

許さない事情にあってたのか、突如として二十三名という多数の中堅団員に、召集令状が届けられたのである。

かねてより覚悟はあったものの、時期から見ても、非常な奇襲であった。しかし、命令とあらば仕方なしとばかり、きりやりの日まで馬を追い、幾多の悪いを残しつつ、五月二十三日、東満方面に伺い、一斉に団を後にした。この中には教師として前住着任した氏分りの兒玉紳雄、入植以来一貫して本部で事務を執つて柳井光などをも含まれていたが、このときも亦多者の半数近くが、異らぬ人となつてゐる。

襲撃の最盛期に、多数の男手を奪われ、作業は一時停滞したが、歎かれた人達の懸命の努力で、規模を落とすこともなく作付を終了した。

この頃、郷土の大分県下には連日の如く空襲があり、各地に大きな被害を山してゐた。二十八日には入つた第三次隊員の詰り、本隊が必死して数日後、宇佐の航空隊が爆撃され、民間に土米常の多数の犠牲者を出した。御ヶ浦の女学校もこのとき焼失した。そのあと四月二十六日には佐伯の航空隊が爆撃され、中學校前の防空壕では三十人近い人が身死した。また隊員達自身も、終戦式の当日へ五月十七日か、大分市で空襲を体験したという。

この被害を翻かされた団の人達は、今更の如く、戦後の緊迫に驚くとともに、安全なこの地に移り住んだ幸せを喜んでゐた。

ところが、水田除草に追われていた六月二十六日、再び前田を上廻る規模の召集令状がきて、三十名近い男子が団から引き抜かれ、農作業の困難はおろか、治安の上から土憂慮される事態を迎えた。左で前回と異なり、応召者の入隊先が、開高省に伺つた一人を除き、新京、四平、奉天と、いずれも近隣であることは心強く感じられた。

五 農場隊員の動搖

大陸・本土間の海上輸送が非常に困難となつた情勢下で、七月十八・十九の両日、新京で全滿報國農場長會議が開かれ、大分県報國農場からは梅原治夫が代理として出席した。梅原は隊員引率を終えて、東滿地方の視察旅行に出たあと帰国できなくなり、辦事処に身を寄せていたのである。

會議は開拓総局で開かれ、滿州国側からは長官以下多数の高官が出席したが、共催の日本政府側からは、東京出發後十日を要してやっと本朝到着したという農商省の係官一名が姿を見せたのみで、上級職員は飛行機で今日中日は着く筈という心細さであつた。會議の席上お話しつら立つた長官は、

「戦司の見通しとして、本土決戦は避けられず、やがて本土・大陸間の交通も遮断される。このため戦勢の回復まで、如何なる苦難にも耐え、それぞれの立場において、使命を達成する覚悟が必要……」

と述べ、これを承けた形で主管科長から、「在滿報國農場緊急措置」として、次の方針が示された。

「在滿報國農場の使命は、食糧の増産と滿州開拓の達成にある。本年度は内地の電力不足により、多大の努力を傾けたに聞かず、三分の一の隊員しか送出されなかつた。この状況では来年度以降農場の経営が中止され、必がて廢止されることになる。そこでこの危機に對処するため、次の措置をとることとする。

- 一、本年農隊員の派遣のない農場は、これを廢止する。
- 二、本年農隊員の派遣のあつた農場は、その隊員を徵用の形で駐留させることとし、原則としてその帰國を認めない。ただし極弱者、農家の後嗣が(

一人息子、一人娘など、特別の事情あるものはこの際帰国させる。

三、隊員の帰国を許さないことについては、府県知事を通じて親元による承を求むる。或尚手当として一人五十圓を支給するが、これに親元へ送金する。

四、各農場は、隊員の越冬については宿舎の確保等を余り、早急の手配するものとする。

以上

この緊急措置は、大分県報國農場の隊員はも非常の大きな衝撃を与えた。とくに、全員の残留でなく、一部の者を送還する点に問題があった。農場側では慎重に検討の結果、対象を女子隊員にし、その中から該当者十二名を選び、梅原の引率で帰国させることとした。

ところが帰国の途に決めた女子隊員の一人が狂乱状態になり、ついに自殺するという事件まで発生し、農場隊員に大きな動搖を与えた。一方送還の決まった隊員達は、取柄符券延まで出て待機したが、北鮮の清津から出陸する予定の船が欠航しつかず、ついに帰国を断念して、再び農場に引き返したのであった。

六、根こそぎ動員

農場隊員の長期在留が決められた時、動搖する隊員を前に農場長（佐伯開拓團長兼務）は、

「やがて戦場となる本土への帰国を急ぐより、百万の関東軍によつて護られるこの滿州で、しばらく戦況の回復を待て。」

と慰めたのである。そこには、当時の在滿日本人の誰も抱いていない、「関東軍への絶対的信頼」があった。

佐伯開拓團が入植した昭和十六年夏、対ソ示威を目的として行なわれた開特演（関東軍特別大演習）には、兵

員七十万、馬匹十四万、飛行機動六百と、優に二十四ヶ師團に相当する兵力が集中され、太平洋戦争が始められた後も、なおしばらく動くことがなかった。そのときの大々関東軍の印象が、五年経ったいまでも、なお在滿日本人の脳裏に深く刻まれて、この信頼に繋がっているのであった。

しかし、十八年に入り敵の反攻が本格化して以来、次第と南方に兵力を抽出され、その実勢は著しく弱体化していた。ただ対ソ静ひつ保持へ威勢は見せつつ、ソ連と事は構えないの方針により、兵力の維持には奮心していたが、二十年に入り本土決戦に備えて、九州・沖繩方面に兵力を割いた後は、國境前線に近い屯営でも、兵員の減少が目立つ程であった。

これに反し、ドイツ降伏（五月四日）後、國境に向う側にはソ連軍の増強が相次ぎ、その侵攻の危険が日毎に増大していった。

このため関東軍は、急速な兵員の充足を迫られ、ついに食糧確保を犠牲にしてまで、飯槽なき動員に踏み切ったのである。戦後明らかになったところでは、二十年五月以来の根こそぎ動員により、開拓團を始め在滿の各農園、工場等から狩り出された兵員の数は、十二万五千人にも及んだという。

八月五日、最後の動員で團から召集された者は十二名で、もはや、これだけしか該当者は残されていなかったのである。この中には片目の不自由な者も含まれていたという。これで五月以来の志願者は六十八名となり、團に残された成人男子は、團長と出納指導員、それに体の不自由な者数名という厳しい状態であった。

なお、このとき志願者は全員、通化の部隊に入隊した。

七 敗 戦

八月八日午前〇時、極東のソ連軍は一斉に行動を起し、西日興安北省の滿州里、ハロシン、アルシヤン方面から、北日興安北省の海拉尔、孫吳方面から、東日興安省の虎頭、牡丹江省の磐石、開島省の理春方面から回境を越えて、怒涛の如く侵入を開始した。

これに對し關東軍は、五月以來の根こそぎ動員により、急速した部隊を多く前線に投入し、主力は朝鮮に接する大連、新京、圖們を結ぶ三番形の中隊撤退し、回境正面での真剣な抵抗を断念した。これは回絶開拓民に對する重大な背信であった。

もともと滿州農業開拓団は、一たん有事の際は、關東軍の兵站となる役割りを担われ、その大多数は回境に近い鐵路上の要地周辺に入植させられ、いわば軍隊と運命を共にする關係にある。それを無防備にも近い前線付近に放置して逃が去ったのである。

このため回境の防衛線は瞬く間に破られ、後方にある開拓民の村は、ソ連軍の蹂躪を受けて立ちどくことに壊滅し、あるいは銃殺され、あるいは暴行により、あるいは自決により、あるいは飢えにより、世界の移民史上類例がないといわれる、多数の犠牲者を出したのである。

ところが幸いにも、佐伯を含め四平省の開拓団の多くは、この難を逃れることができた。ハロン、アルシヤン方面から自城子を通り、鄭家屯を経て奉天に何かつた、マリノフスキー麾下の軍団は、昌圖県境の西側を南下し、鄭氏で向きを変えたためである。

鄭家屯は佐伯開拓団の北西、大車で二日の行程の位置にあり、供出食糧の集積地でもあった。そしてすぐ近くには八面城が佐伯開拓団に對する建設資材、衣料等の供給

基地で、このとき農場本部勤務の高野一正は、隊員用物資の受領に出張していたが、一足の違いで、これを知らずに無事帰場することができた。

このため佐伯開拓団の地味では、ソ連軍の侵攻を何日も知らずに過ごした者が、十三日には再び辦事所から、避難民を満載した列車が、銃々南下しているとの情報があり、何らかの重大事変が起きたと本部では感知していた。

昭和二十年八月十五日、日本はついに戦いに敗れ、連合國に無条件降伏した。

図がこの事実を知らされたのは、十七日の早朝であった。宝力鎮の警察署から緊急電話を通じ、

「日本は敗戦に負けた。八月十五日の正午、天皇陛下の放送があった。」

と、ただそれだけ伝えられた。電話を受けたのは、經理指導員の出納所であった。

一たんはデマで日ないかと疑ったが、辦事延に電話を入れてみると、

「街には到るところ青天白日旗が掲げられている」との答えが返ってきた。

すべては終わったのである。意外と静かさを、あつけない幕切れであった。

(第一節終り)

(付記)

かこの如くにして、開拓団の夢は無残に潰滅して去った。しかし矢野團長はじめ佐伯開拓団員は懇願、またこの佐伯開拓団を送出した閣僚断片の人々の期待は、記念碑のようには、いつまでも残ることでありう。

(編集者)